

【原著論文】

ゴシックの悪漢としての「ピサロ」

——『ペルーのスペイン人』の歴史的背景

市川 純

外国語学研究室

“Pizarro” as a Gothic Villain: Historical Backgrounds of *The Spaniards in Peru*

Jun ICHIKAWA

Abstract: In his “Preface” to *Lyrical Ballads* (2nd ed. 1800), William Wordsworth blames “frantic novels” and “sickly and stupid German Tragedies” for driving the works of Shakespeare and Milton into neglect. The term “frantic novels” refers to the Gothic romance of the age, and “German Tragedies” was used to describe especially the ones written by the German playwright August von Kotzebue. English translations and adaptations of his tragedy *Die Spanier in Peru, oder Rollas Tod* (1796) were highly popular in English theaters. Even the name of “Monk” Lewis, who produced a translation, *Rolla, or the Peruvian Hero* (1799), can be found alongside Ann Plumptre (*The Spaniards in Peru, or the Death of Rolla*, 1799), Thomas Dutton (*Pizarro in Peru, or the Death of Rolla*, 1799) and Richard Brinsley Sheridan (*Pizarro*, 1799).

Compared to the rich resources available for the study of Gothic romance, *The Spaniards in Peru* has not been discussed enough to estimate its literary value. However, this drama about the Spanish conqueror Pizarro’s cruel deeds against the Peruvian people and their resistance can still be closely compared with Gothic romance. If we look at the play from the literary, historical, and social perspectives, we find that Pizarro embodies certain Gothic characteristics that have been pointed out by Gothic scholars like his tyrannical deeds and character, which is reminiscent of Gothic villains and the depiction of Spanish cruelties in Peru designed to rouse the English audience’s/reader’s anti-Catholic feelings. At the same time, dramatizing the Spanish conquest of the Peruvian people was relevant to the anti-slavery controversy and the trend of philanthropy in the English literary society of this age, a subject that has recently been taken up for discussion among English Romantic scholars. In other words, *The Spaniards in Peru* is a kind of literary crossroad that connects the study of Gothic romance and of English Romantic literature.

This paper discusses Kotzebue’s *The Spaniards in Peru* by juxtaposing it with the contemporary Gothic romance and tracing its literary value against the context of Gothic characteristics. By empirically examining the play’s popularity in its historical context, we can discuss its political aspects. Furthermore, such a comparison could show some unmissable relationships between the narrative of *The Spaniards in Peru* and some of the issues raised by the study of post colonialism and orientalism. This methodology rewards the study of both Gothic literature and English Romanticism.

要旨: ウィリアム・ワーズワスは『抒情民謡集』第2版(1800)の序文において、「狂った小説」や「気分の悪い馬鹿げたドイツの悲劇」によってシェイクスピアやミルトンの作品が無視される状況に追い込まれていることを批判している。ここでいう「狂った小説」とは当時のゴシック・ロマンスを指し、「ドイツの悲劇」は特にドイツの劇作家アウグスト・フォン・コツェブーによって書かれた作品を示している。コツェブーの悲劇の中でも『ペルーのスペイン人、またはロラの死』(1796)は英語への翻訳や翻案がいくつも作られ、イギリスの劇場で多大な人気を獲得していた。ここには『ペルーのスペイン人、またはロラの死』(1799)として翻訳したアン・プランプトリの他、『ペルーのピサロ、またはロラの死』(1799)のトマス・ダットン、『ピサロ』(1799)のリチャード・プリングリー・シェリダンに加え、『ロラ、またはペルーの英雄』(1799)の訳者「マンク」・ルイスの名も見られる。

ゴシック・ロマンスの豊富な先行研究に比べ、『ペルーのスペイン人』はこれまでその文学的価値を

十分議論されてこなかった。しかし、スペイン人征服者ピサロがペルーの民に行った残虐な所業、およびそれに対する彼らの抵抗を描くこの劇作品は、ゴシック・ロマンスと比較考察すべき特徴を十分備えている。この作品を文学的、歴史的、また社会的視点から考察することで、ピサロがゴシック研究において指摘されているある特徴を備えていることがわかる。つまり、ピサロの暴君的な行いや性格はゴシックにおける悪漢の性質を持ち、ペルーに対するスペインの残虐な行為の描写はイギリスの観客や読者の反カトリック的感情を煽る仕組みになっているのである。また同時に、スペインによるペルー人征服を劇化することは、当時のイギリスの文学潮流における反奴隷制論争や博愛主義運動の高まりとも関係している。これらの問題はイギリス・ロマン主義文学研究においても昨今取り上げられるようになったテーマである。『ペルーのスペイン人』はゴシック・ロマンス研究とイギリス・ロマン主義文学研究とをつなぐ作品であるといつてよい。

本稿はコツェブーの『ペルーのスペイン人』を同時代のゴシック・ロマンスと比較考察し、ゴシックの特徴と照らし合わせてその文学作品としての意義を探る。また、この劇の人気を歴史的な文脈において実証的に検証し、その政治的側面についても議論する。さらに、このような比較検証によって『ペルーのスペイン人』で描かれている内容がポストコロニアル批評やオリエンタリズム研究によって提起される重要な問題とも関係していることを示す。この方法により、ゴシック文学研究とイギリス・ロマン主義文学研究双方に有益な知見をもたらす。

(Received: May 10, 2018 Accepted: August 3, 2018)

Key words: Kotzebue, *The Spaniards in Peru*, Pizarro, Gothic, slave trade

キーワード: コツェブー, 『ペルーのスペイン人』, ピサロ, ゴシック, 奴隷貿易

スペインやポルトガルの征服者が、その発見し制圧した島々や大陸を占有したのは、イエス・キリストの名においてであった。十字架を樹てることは、新しい国土の正当化、清め、及び「新生」と等しく、かくてパプティスマ（創造のわざ）をくり返すことなのである。同様に次には英国の航海者たちが、その占領した領土の占有を、新たな宇宙創造者たるイングランド王の名において行ったのである。——エリアーデ¹⁾

序

ワーズワス (William Wordsworth) は『抒情民謡集』 (*Lyrical Ballads*) 第二版 (1800) の序文の中で、「狂った小説」 (*frantic novels*) と「気分の悪い馬鹿げたドイツの悲劇」 (*sickly and stupid German Tragedies*) によって、イギリスの偉大な文学的遺産であるシェイクスピアやミルトンの作品が追いやられている状況を批判していた²⁾。ここでいう「狂った小説」は当時流行のゴシック・ロマンス、「気分の悪い馬鹿げたドイツの悲劇」は英訳されて人気を博していたドイツの演劇、具体的にはこの時代に一世を風靡したアウグスト・フォン・コツェブー (August von Kotzebue) 作の悲劇と見られている。現代ではその名を聞くことも少なくなったコツェブーであるが、彼の悲劇作品の中でもとりわけ『ペルーのスペイン人、またはロラの死』 (*Die Spanier in Peru, oder Rollas Tod* 1796, 以下『ペルーのスペイン人』) は当時人気非常高く、それがどのような作品で、いかなる理由でワーズワスに批判されていたのかなどについて、筆者は既に別のところで分析し、論じた³⁾。本稿はその議論を踏まえた上で、ワーズワスが上記序文で『ペルーのスペイン人』をゴシック・ロマンスと並べて批判している点に注目し、両者の繋がりについてさらに深く議論を展開する。

なお、ゴシック・ロマンスとの関連について議論する前提として、既に論じた話題ではあるが、『ペルーのスペイン人』が人気を博した当時の状況について、ここで簡単に整理しておく。ワーズワスが『抒情民謡集』を執筆した頃のイギリスでは、ゲーテやシラーといった現在に至るまで文学的評価の高いドイツ人文学者の作品も英訳されていたが、その一方でコツェブーの作品は大衆の人気極めて高く、ドゥルリー・レーン (Drury Lane) やコヴェント・ガーデン (Covent Garden) といった劇場においては、一時期シェイクスピア作品よりもコツェブー作品を上演していた可能性の方が6倍高い計算になるという⁴⁾。特にスペインの征服者の一人であるフランシスコ・ピサロ (Francisco Pizarro) を主人公にした悲劇『ペルーのスペイン人』はドイツでもかなりの人気を獲得しており、これが様々な翻訳家によって英訳され、その中にはゴシック小説『マンク』 (*The Monk* 1796) の作者として知名度の高いマシュー・グレゴリー・ルイス (Matthew Gregory Lewis) も含まれる。また、リチャード・プリンズリー・シェリダン (Richard Brinsley Sheridan) による翻案では当代の名優ジョン・ケンブル (John Kemble) やサラ・シドons (Sarah Siddons) らが起用されて多くの観客を動員し、シェリダンの翻案は一年で20版も刊行された⁵⁾。コツェブーの名声はその後

の文学史にまで刻まれるものとは言い難いが、彼の名声が高まった時期はちょうどゴシック・ロマンスの人氣が頂点を極めた頃、つまり1800年前後である。そしてワーズワスが先の序文を発表し、両ジャンルを批判したのも1800年のことであり、文学史上の大きな潮流と関係し合う問題を含んでいる。

本稿はワーズワスがゴシック・ロマンスとドイツの悲劇という二つのジャンルを並列して批判しているところに必然性を見出し、そこからコツェブーの『ペルーのスペイン人』が極めて重要な歴史的課題を提示するものであることを明らかにする。なお、コツェブーにはこの作品以外にも人氣を獲得した悲劇があるが、ここではとりわけ当時の社会現象とも言い得る「ピサロ・フィーバー」⁶⁾を巻き起こした『ペルーのスペイン人』に注目して議論を進める。最初に、この悲劇をゴシック研究において指摘されている特徴の一つである「悪漢ヒーロー」(hero-villain)の観点から分析し、両者共通の特徴を提示する。さらに、この「悪漢ヒーロー」の登場する作品のテーマが当時の歴史的、社会的問題への意識と密接につながっている点について論を進め、『ペルーのスペイン人』の爆発的人氣が起こった必然性を明らかにする。最後にこれらの議論を踏まえ、この作品がイギリスとスペイン、さらにはフランスとの関係、そしてヨーロッパによる植民地政策や反奴隷制運動といった政治的、また歴史的に重要な考察課題を含んでいる点について論じる。ワーズワス自身が二つのジャンルの共通した特徴をその本質に含んでいたことを意識していたかどうかは定かではないが、以上の考察を深めることで、両ジャンルの密接な関連性とその重要性について提示する。

悪漢ヒーロー

ドイツ悲劇の人氣に対して批判的だったのは冒頭に述べたワーズワスだけではない。この時代の文筆家また慈善家として知られているハナ・モア(Hannah More)や『アンチ・ジャコバン・レビュー』(*Anti-Jacobin Review*)のような保守的な立場の定期刊行物にも批判的言説が見られる⁷⁾。にもかかわらず多くの人々がドイツの悲劇に熱狂していたのはなぜか、当時ドイツ演劇が人氣を博した理由についてその背景を探り、ゴシック・ロマンスとの関連性の議論へと繋げる。

当時のドイツ演劇人氣に関し、V・ストックリー(V. Stockley)は19世紀初頭のある劇評を紹介し、ドイツ演劇の熱狂を説明する三つの理由を挙げている。これは『ペルーのスペイン人』の人氣について議論を組み立てる上でも参考になる。

(1) それ [ドイツ演劇] はイギリスのエリザベス女

王時代のものに近い演劇として、時代遅れながらも受け入れられ、エリザベス時代の劇との類似点が非常に目立つところでは、異なる性質が忘れられてしまった。(2) 当時の大衆の好みは、規則に従って執筆する擬古典的な劇作家の堅苦しくお決まりの美的作品に飽きていた。このあまりの単調さへの反動として、ドイツ演劇ほど新たな好みに合うものは他になかった。ドイツ演劇の主な特徴は何もかも大袈裟であること——極端な恐怖、幸福と不幸のあり得ない極度、半ば天使半ば悪魔の登場人物、なのであった。(3) この時代の国内の劇作家における真の才能の不在。⁸⁾

18世紀終わりのイギリス演劇の観客にとって、ドイツの悲劇は新鮮で魅力的であったのだが、同時に観客は過去のイギリス演劇に見出される要素を再び見出していたというのだ。イギリスに流入したドイツの演劇こそイギリス演劇の黄金時代の作品を想起させるものであり、エリザベス時代の演劇の名のもとに人々が求めたものは、とにかく過剰な要素であった。それが時には低俗なものへ向かう傾向があったことは英文学史において明らかである。そしてそれはワーズワスが批判した点でもある。

もっとも、ワーズワスも含め、ロマン派詩人たちも演劇は書いていたが、実際に上演することが難しい内省的な作品が多く、むしろ読むための演劇、書齋劇(closet drama)へと向かう傾向があった。このため、実際の舞台にかけられる作品を書けるかどうかという点においては、引用にある「国内の劇作家における真の才能の不在」が問題視される状況となり、それがドイツ演劇の数多くの翻訳、そしてその盛んな上演を生む理由ともなったのである。

では、コツェブーの演劇はこのような演劇状況の中で成功を収める理由として、どのような特徴を備えていたのだろうか。クリストフ・ボード(Christoph Bode)はコツェブー演劇の特色を以下のようにまとめている。

まず、彼の演劇は感傷的でメロドラマ的なお涙頂戴ものである。恋人たちは誤解がもとで、あるいは名誉に関わる誤った考えによって引き離されたり、ばらばらになったりする。両親や子供たちは気まぐれや偏見によって別れ、友人たちは誤って互いを敵とみなし、親戚は相互を赤の他人と誤解する。だが、決まって最後は、子供たちが両親の腕に飛び込んだり、恋人たちが互いに永遠の貞節を誓ったりして、皆が再び結びつき合い、全てが許される。ただし、下劣な貴族や暴君、もしくは愚かな夢想家の詩人だけは大団円に加わることが許されない。⁹⁾

「感傷的でメロドラマ的なお涙頂戴もの」という指摘については、ストックリーの示した(2)の特徴とも重なるところである。特にこれから詳細を分析する『ペルーのスペイン人』に関しては非常に強い感情を描き出す場面や、観客や読者に対して扇情的な台詞が繰り返される場所が多く、調和のとれた擬古典主義的な美的感覚からすれば、過剰と見られる要素が極めて大きい。また、ボードの上記引用は悲劇のみならず喜劇も含めたコツェブー演劇の特徴を示すものだが、いずれにしても劇の展開はある程度パターン化しており、それは『ペルーのスペイン人』にも符合するところがある。また、近い人物同士が引き離されて最後に再会して大団円に向かう流れは、『ペルーのスペイン人』におけるクライマックスにおいても共通のものである。こういった要素にかつてのエリザベス時代の演劇の特徴も思い起こされ、さらに同時代のイギリス人劇作家がコツェブーの作品を凌ぐ人気作品を提供することもできない状況の中、時代が求める演劇要素を多分に含んだコツェブーの作品は、批判を受けながらも莫大な人気を集め、特に『ペルーのスペイン人』は人々を熱狂させていたのである。

この作品はコツェブー作品の中でも特に多くの翻訳、翻案を生んでおり、またそれらが短期間のうちに出版されている事実もこの悲劇の人気の高さを示している。また、それぞれの英訳タイトルの相違点を見ると、この作品の本質的問題が象徴されていることもわかる。アン・プランプトリ (Anne Plumtre) の英訳ではタイトルが『ペルーのスペイン人、またはロラの死』(The Spaniards in Peru; or, the Death of Rolla 1799) と元のドイツ語タイトルに近く、マシュー・グレゴリー・ルイスは『ロラ、またはペルーの英雄』(Rolla; or, the Peruvian Hero 1799) と英訳タイトルをつけた。逆に、対立するピサロを強調した題名を付ける翻訳や翻案もあり、シェリダンによる翻案はその名も『ピサロ』(Pizarro 1799)、他にもトマス・ダットン (Thomas Dutton) による『ペルーのピサロ、またはロラの死』(Pizarro in Peru, or the Death of Rolla 1799)、ベンジャミン・トムソン (Benjamin Thompson) による『ピサロ、またはロラの死』(Pizarro, or the Death of Rolla 1801)、ウィリアム・ダンラップ (William Dunlap) の『ペルーのピサロ、またはロラの死』(Pizarro in Peru; or, the Death of Rolla 1800) といった題もある。これらの翻訳、翻案例の題名に明らかなように、題名にペルー人英雄ロラを強調するか、対立するスペイン人征服者ピサロを強調するかという正反対の立場が生じていたのである。

原題では命を賭したペルー人英雄ロラの個人名が示されているが、上述した翻訳、翻案例において対立す

るピサロの名を用いた例が拮抗して多いのは、それだけこの征服者が作品の主題としての役割に関わる重要な存在であることを示している。実際、ロラを英雄的な主人公としてみなすとしても、対照的に残虐な征服者であるピサロの姿は強烈であり、悪漢としての大きな存在感を漂わせている。そして後に詳述するように、この悪役としてのピサロは当時の人気文学ジャンル、ゴシック・ロマンスとも密接につながるのである。

では、この作品におけるピサロの存在感とはどのようなものなのか、そしてそれがゴシック・ロマンスとどうつながるのか、これらの点について以下に考察を進める。なお、本稿では比較のコツェブーのオリジナルに近いと思われるプランプトリの訳を考察の主な底本とし、必要に応じてその他の訳を参照する。

舞台はペルーに設けられたピサロの天幕で始まる。彼の残虐非道な征服者としての振る舞いが描かれる前に、ピサロの恋人エルビラ (Elvira) とピサロの秘書役で彼女に思いを寄せるバルベルデ (Valverde)¹⁰⁾ が登場する。そこではエルビラの言葉を通して、ピサロの魅力的な側面が語られる。以下は第1幕第1場のエルビラのセリフの一節である。

彼 [ピサロ] は自分の才能の力だけで、豚追いという低い身分から偉大な軍人として高い階級に叩き上げたのです。彼が小さな船に乗って、たった百人の仲間たちと一緒に、見知らぬ世界を征服するためにパナマを出た時、私の心がこう騒ぎました。「きつと豪胆な人なのね」¹¹⁾

エルビラは昔のピサロを回想しつつ、その偉大さに魅了されたことを語る。上記引用の後にはさらに、命を懸けて目的を遂げようとするピサロを「立派な人だ!」と心のうちに叫んで讃えたことも語られる¹²⁾。

エルビラによるピサロの肯定的な評価は、あくまで過去の体験として勇ましかった姿のピサロに魅了されたことを語るものだが、舞台は暴虐一辺倒にピサロを描くのではなく、あらかじめ勇敢な英雄的側面を提示し、その後で冷酷無慈悲な言動を披露している。このタイプの暴君、すなわち、観客もしくは読者に対して親しみを覚えさせたり、同情を惹き付けたりする魅力を備えた暴君は、ゴシック・ロマンスの登場人物における典型的な例の一つとして指摘されている。たとえばホレス・ウォルポール (Horace Walpole) の『オトランド城』(The Castle of Otranto 1764) におけるマンフレッド (Manfred) や、アン・ラドクリフ (Ann Radcliffe) の『ユードルフォの謎』(The Mysteries of Udolpho 1794) に登場するモントーニ (Montoni)、さらには先に『ペルーのスペイン人』の翻訳者の一人と

して挙げたルイスによる『マンク』における主人公アンブロシオ (Ambrosio) などもそうである¹³⁾。これらの暴君的な人物の人間的な部分の程度や、読者がどれくらいその人物に同情、共感を抱けるのかという点においてはそれぞれ差があるものの、ピサロの人物造形はこれらのゴシック・ロマンスの系譜に沿うものといえる。また、残酷で悪魔的性格の人物像は、先述したストックリーによるドイツ演劇に求められていたものとも一致する。

このように人を魅了しつつも残酷な側面を持った人物は、ゴシック研究において「悪漢ヒーロー」と呼ばれるものである。悪漢ヒーローとは「偉大な功績と恐ろしい行為の双方に可能性を備えた、複雑で典型的に人間らしい性格」¹⁴⁾であり、ピサロは勇敢なスペイン人征服者としての魅力を持ちながら、またそれだけ一層ペルー人に対する無慈悲な側面も強調されている。ピサロの二面性は「自身が板挟みとなって、魅力的であると同程度に破壊的な人格でもあるというこの矛盾を同時に貫かねばならない」¹⁵⁾という「悪漢ヒーロー」の特徴に一致するものだ。従って、悪漢ヒーローとして作品の中心的人物に据えられているピサロは、ゴシック・ロマンスとの強い繋がりを示すものである。『ペルーのスペイン人』を例に考察する限り、ワーズワスが一緒に並べて批判した「狂った小説」と「気分の悪い馬鹿げたドイツの悲劇」の間には有機的なつながりが見られ、これらは批判対象としてただ羅列されているのではなく、共通した特徴を持つものとして並列しているのだといえる。

『ペルーのスペイン人』は18世紀末のイギリスにおいて求められていた演劇作品の要素を十分に含み、さらに同時代に一般読者からの絶大な人気を得ていたジャンルであるゴシック・ロマンスとの共通点も兼ね備えており、この悲劇がイギリスで人気を博した十分な理由を備えているものと考えられる。ただ、この作品の悪漢ヒーローはピサロというスペインの征服者であり、歴史上実在した人物である。この点は、イギリスとスペインの歴史的な関係性を考えれば、さらに深く考察する必要がある。そこで、ペルー征服におけるピサロの役割について、その是非を巡る論争の歴史的経緯を次節で考察する。

ペルー征服に関する論争

コツェブーの劇で大きな存在感を示し、悪漢ヒーローとしての特色を持った残忍な人物として描かれるピサロであるが、歴史上の人物としての彼の評価はいかなるものであったのか。ここでは彼の評価を巡る論争を歴史的に検証し、歴史上の人物としてのピサロのイメージがコツェブーの作品の人気とどう関係してい

るのかを探る。

大航海時代のスペインが南米に覇権を広げた時代の征服者の一人として、ピサロを英雄視する向きもある。だが一方で、その残酷な手法は征服戦争が行われた当時のスペインにおいても論争になっている。ここでは征服戦争の否定派と肯定派それぞれを代表する人物の主張を確認し、『ペルーのスペイン人』との繋がりを考察する。

ドミニコ会修道司祭のバルトロメ・デ・ラス・カサス (Bartolomé de las Casas) は、ドミニコ会に入る以前の1502年に征服者の一人として新大陸に渡り、スペイン人征服者たちが南米の原住民に対して残虐非道の極みを尽くすのを直接見聞した。その後スペインに帰国し、スペイン軍による現地人への不当な拷問や殺害などを報告し、征服戦争を強く批判する。これはその後『インディアスの破壊についての簡潔な報告』(*Brevisima Relación de la Destrucción de las Indias* 1552)として出版される。

本書において、ラス・カサスはコツェブーの悲劇にも描かれるペルーも含め、現ハイチ共和国及びドミニカ共和国のあるエスピノーラ島やキューバ島、さらにはフロリダ等、インディアスと呼ばれるこの地域一帯に住む原住民インディオに対してスペインが行った所業について、犠牲となったインディオの具体的な数字を列挙し、次々と報告を重ねている。インディオの性格については以下のように述べている。

神はすべての民族の中で、このインディアス一帯に住む無数の人びとをことごとく、この上なく素朴で、悪意や二心をもたない民として、また、きわめて恭順で、もともと従ってきた土着の首長にも、また今現在仕えているキリスト教徒にもじつに忠実な民として創造された。彼らは世界中のどの民族よりも謙虚で辛抱強く、また、温厚でおとなしく、諍いや騒動を好まない。また、彼らは口論したり不満を抱いたりすることもなければ、人に怨みや憎しみ、それに復讐する気持ちを抱くこともない。¹⁶⁾

ラス・カサスの報告によれば、インディオは上記のような穏やかさをその性格の特徴とし、スペインから到来した人間たちにも極めて親切に、友好的な対応をしていた。また、温厚な彼らに対するカトリックの聖職者としての見解は以下のように書かれている。

インディアスの人びとは地上のどの民族より、明晰かつ何ものにも囚われない鋭い判断力を具え、あらゆる秀れた教えを理解し、守ることができる。彼らはわが聖なるカトリックの信仰を受け入れ、徳高い

習慣を身につけるのに十分な能力をもちあわせている。すなわち、彼らは、神がこの世に創造されたあらゆる人間の中で、信仰へ導くのに障害となるものがとりわけ数少ない人たちである。インディアスの人びとは信仰に関する事柄を知るようになると、それを理解したり、教会の秘蹟や礼拝を実行したりするのに非常に熱心なので、聖職者は彼らの執拗な願いを引き受けるためには、実際、神から忍耐という特別な恵みを授かっていなければならないほどである。¹⁷⁾

もちろんラス・カサスは異教の民へキリスト教を広める使命を持っていたが、彼が目指していたのは平和的な布教及び植民であった。暴力的な方法によるインディアスの植民地化や、キリスト教に改宗させるための残虐な行為を容認するものではない。

だが、インディアスに対する暴虐はやまず、特にピサロによるペルー征服に関して、ラス・カサスは以下のように批判している。

その無^{ティラーノ}法者は 1510 年以來、ティエラ・フィルメ地方で、ほかの誰よりも長期間にわたり、ありとあらゆる残酷な所業や破壊に耽った連中のひとりである。そのため、彼はペルーでは、よりいっそう残忍な振る舞いや虐殺や略奪を重ねることになった。彼は信義に背き、約束を守らず、ただひたすら村々を破壊し、暮らしていた人びとを破滅させ、殺害していった。それが原因となって、ペルーでは、その後もひきつづき、甚大な惨禍が繰り返されることになった。¹⁸⁾

本書における序詞や結辞などを除いた本編 21 節の中で、ペルーについての章は後ろから 2 番目である。既にそれまでの章で様々な残虐非道が具体的に記述されているが、その中でもここで「無^{ティラーノ}法者」の名で記されているピサロはとりわけ悪逆な人間として捉えられている。上記引用の後には、『ペルーのスペイン人』にも登場するインカ国王を捕虜にして身代金の取り決めをしたにも関わらず、膨大な金を受け取っておいて約束を破り、王を絞首刑にしてさらには火あぶりに処したことが記されている。

このようにピサロを含むスペインの征服者の残酷さを示したラス・カサスの著作は各国語に翻訳された。1598 年に出版されたラテン語版以降はその残虐な振る舞いを描く版画が挿入され、視覚的にもそのおぞましが世界中に広まることになる (図 1, 2)。そして、カトリックもしくはスペインと対立する国々においては、本書がスペインの非道さに対する反感を強く煽る



図 1 *The Tears of the Indians* より²⁰⁾



図 2 *The Tears of the Indians* より²¹⁾

だけでなく、反スペイン的な運動を進める上での根拠ともなり、そのためスペイン国内ではラス・カサスのこの書が批判される動きにもなった¹⁹⁾。

ラス・カサスの主張とは反対に、スペインのユマニスト、およびアリストテレス学者であったフアン・ヒネース・デ・セプールベダ (Juan Ginés de Sepúlveda) は『第二のデモクラテス』 (*Ioannis Genesii Sepulveda artium, et sacrae theologiae doctoris dialogus, qui inscribitur Democrates secundus de iustis belli causis* 1892) や『アポロギア』 (*Apologia Ioannis Genesii Sepulveda pro libro de iustis belli causis* 1550) を執筆し、インディアス征服の正当性を論じている。その主張の根拠について、以下に前者の一節を引用して示す。

君主に対する戦争は、先祖が立てた誓い、法律、それに取り決めに違反し、国を大いに乱すことになりませんが、野蛮人に対する戦争は自然法に基づき、その目的は敗者に大きな利益をもたらすことにあります。すなわち、野蛮人はキリスト教徒から人間としての尊厳の価値を学び、徳の実践に慣れ、正しい教えと慈悲深い忠告を受けることにより、すすんでキリスト教を受け入れる心の準備をするようになるからです。²²⁾

セプールベダの論調は、インディオに対する残酷な行為そのものを直接認めるものではないが、「野蛮人」とみなされる彼らをキリスト教の名のもとに征服し、改宗させることは、インディオにも利するものであり、これは自然法にも適うというのである。

また、現地で直接インディオの実態を見聞したラス・カサスに対して、セプールベダはあくまで現地からの報告でしかインディオについて知らない。にもかかわらず、インディオの宗教信仰に対しては非常に厳しく批判的な見方を繰り返す。

つまり、彼らは人間を生け贄にしなければならないと考えているのです。彼らは人間の胸を引き裂き、心臓をえぐり出し、忌まわしい祭壇に捧げ、そうして生け贄の儀式を行い、それで神々の怒りを宥めたと信じています。そのうえ、それに飽き足らず、こともあろうか、彼ら自身、生け贄の犠牲になった人たちの肉を口にしているのです。そうしたことは人間が犯すあらゆる悪行の中で最悪の罪業であり、哲学者たちがこの上なく凶悪でおぞましい背徳行為とみなしている犯罪行為です。²³⁾

インディオは人身御供やカニバリズムのイメージを伴った、悪魔主義的民族としてとらえられ、この野蛮な人々をキリスト教信仰によって「救う」ことは理に適い、そのための征服戦争は正当化されるというのである。セプールベダはアリストテレスや聖トマス、聖書からの引用を随所に挟んで論拠とし、主張を推し進めていく。ラス・カサスとは真っ向から対立し、以後インディアス征服戦争の是非をめぐる激しい論争を繰り返したのである。

これらの激しい論戦、またヨーロッパ各国との政治的關係などが作用して、1542年に「インディアス新法」(Leyes y ordenanzas nuevamente hechas por su Majestad para la gobernación de las Indias y buen tratamiento y conservación de los Indios)が制定され、以降激しい賛否両論はありながらも、インディオに対する政策は改まってくる。だが、スペインの残酷なイ

メージはその後も消えないのである。特にイギリス文学はエリザベス時代におけるスペインとの敵対関係以来、このイメージを反映している。ある種の憧れや理想化を伴った情熱的なスペイン人というイメージもある一方、残酷な民族という偏見も交えた類型的なイメージは根強く、復讐劇として有名なトマス・キッド(Thomas Kyd)の『スペインの悲劇』(*The Spanish Tragedy* 1592)はその一例といえよう。ルネサンス時代が終焉を迎えてスペインが政治的な脅威でなくなった時代においても、引き続きこの紋切り型スペイン人像が利用されており、ディエゴ・サリャ(Diego Sallia)によれば、18世紀に至ってもコツェブーの悲劇が流行する以前にスペインの悪いイメージがプロバガンダとして用いられていた²⁴⁾。

このようなスペイン表象の経緯を踏まえると、コツェブーの作品において特徴的なのは、劇の内部にスペインの残酷な征服事業を大々的に批判する者を登場人物の中に含めているところである。しかもそれは先述したラス・カサスであり、ペルー人を奴隷にしようというピサロの企みを、舞台上でピサロの面と向かって非難するのだ。

嗚呼、すでにあなたの強欲の無駄な犠牲となった何百万人もの不幸な犠牲者を少しでも思い出してみなさい！——あなたはこの人たちに神として受け入れられながら、悪魔としてやってきたのです！——彼らは是非にと進んで自らの金や果物をあなたに与えた。一方あなたはその見返りに彼らの妻や娘に暴行したのです。——そんな非道は人間として許せず、虐げられた者は不平をこぼし始めました。するとあなたは獵犬を送り込んで彼らを追い詰めようとした。一方、この地獄の追跡から逃れた人たちは、あなたが使うために自らの土地を耕すよう鋤を押し付けられるか、あるいは金銀に埋められて貴重な金であなたの飽くなき貪欲を満たさねばならなかったのです。²⁵⁾

ラス・カサスは自分の著書の中でピサロに対して批判的であったが、ペルーに行き直接ピサロを非難したという史実はない。それが『ペルーのスペイン人』ではこのように舞台上に登場し、ピサロ本人に向かって直接その所業を止めようとするので、歴史的文献を超えた極めて劇的な効果を生んでいる。

だがピサロはラス・カサスの言葉によって方針を変えることはなく、引き続き無慈悲な征服計画を進め、インカ国王アタリバ(Ataliba)²⁶⁾の娘と結婚して王位を継ぐつもりでいる。もはやエルピラの愛情も失い、冷酷に計画を進めていく。彼の冷酷な性格は、軍を離

脱してペルー人女性コラ (Cora) と結婚したスペイン人男性アロンソ (Alonzo) の幼い子供を発見した際にも強烈な形で示されている。その悪魔的な表現は、アロンソの親友であるペルー人の英雄ロラ (Rolla) の前で以下のように放たれる。

この小さな頭を槍先に掲げるのはどうだ。——そして英雄アロンソが、目の前のもの全てを圧倒して、密集した敵兵の間を激流のように押し分けて前に出たとき、その進行を食い止める盛り土はなんだろうか。——子供の頭だ。ほうら、英雄は彫像のように動かなくなる。——手は麻痺して剣を落とす。——目には恐怖を浮かべて血まみれの旗に釘づけた。そこからまだ血が槍に滴っているのだ。嗚呼、これは見ものだよ！²⁷⁾

劇の最後でアロンソの息子はロラによって救われるが、ロラはピサロの兵の攻撃によって致命傷を負い、コラへの愛を告白しながら地に倒れる。

アロンソ、ロラ、そしてラス・カサスと比較して、ピサロには悪漢ヒーローとしての特質が備わっているとはいえ、劇の中盤以降は専ら残虐な性格の方が際立っている。ラス・カサスの人道主義的な性格や、アロンソとロラの友情と勇気、これらの描写が繰り返されながら、対照的に対立軸として設定されているピサロの残酷さは一層強くなっている。18世紀末のイギリスにおいて、スペインのステレオタイプなイメージは特にピサロの性格造形に投影されている。だが、さらに重要なのは、悪漢ピサロが対立する立場のラス・カサスやその弟子であるアロンソ、またペルー人英雄ロラらによって批判されてもいることだ。つまり、同じ作品の中で、スペインの征服戦争を描きながらも同時にそれをスペイン人が批判する文学作品が18世紀末のイギリスで人気を博していたのだ。

ちなみにシェリダンによる翻案ではロラの死で舞台は終わらず、その後、戦闘場面へと移行して、アロンソはピサロへの復讐を果たし、ロラの遺体を担いだ葬列の場面によって幕を閉じる²⁸⁾。史実から逸脱した展開であり、実際のピサロはその後インカ皇帝を処刑してこれが大問題となり、また、その最期はピサロと対立して処刑されたライバルのディエゴ・デ・アルマグロ (Diego de Almagro) の息子たちによる暗殺によって遂げられている。シェリダンによるこの結末は、観客に対する扇情的な効果を狙ったメロドラマ的展開のための翻案ともとれるが、ここでスペイン人による残酷な所業が同じスペイン人によって罰せられ、その命を滅ぼされていることは重要である。元来のコツェブーの原作でもスペインとペルーは単純な二項対立の

関係にあるのではなく、スペインの中にさらにもう一つの対立構造があって、そのうちの一方がペルーとの絆で強く結びついている。シェリダンの翻案は、スペイン人アロンソとペルー人との結びつきをさらに強調し、ピサロを滅ぼすまでの力を付与しているのである²⁹⁾。

このような展開の作品が書かれ、また人気を博した背景には、当時のイギリスにおいて、スペインが16世紀におけるような大きな脅威ではなかったことが考えられる。アメリカの植民地を巡る争いなどで対立関係は依然としてあったが、アルマダの海戦の時代に味わったような本国に差し迫る巨大な脅威として存在感を示すものではなかった。従ってスペインを一面的に悪としてのみ表象する必要性も陰り、昔からの偏見によるスペイン人のイメージはありながらも、悪一辺倒ではなく、それを批判し、改めようとするイメージとのせめぎ合いを含ませることもできたのである。『ペルーのスペイン人』の登場人物の中で、同じスペイン人でありながらも対立構造が見られるのは、この時代のイギリスにおけるスペインのイメージを、ある種象徴的な形で示しているといえよう。

『ペルーのスペイン人』が人気を博した18世紀終わりにおいて、イギリスにとって脅威となっていたのはスペインよりもむしろ、革命の起こったフランスである。実際の政治状況から見れば、この作品のピサロとその一味に重ね合わされるのは上演当時のスペインの状況よりもフランスだったと思われる。この点について、以下に考察を進める。

『ペルーのスペイン人』のイギリスにおける受容について、作品内部の特徴を検証した先行研究は少ないが、その中でも最近の論考から本稿の議論の参考となるサリヤとボードの見解を以下に示す。サリヤは『ペルーのスペイン人』をフランス革命との関係からイデオロギー的に読解し、「もし国王ジョージが父権的な統治者であるペルーの国王アタリバによって表現されていたのなら、無慈悲な征服者たちはフランスの侵略者として解釈された。その一方で、困難な状況で苦しむペルーの人々は国の大義と同一視しえた」という³⁰⁾。ボードもこの作品にフランスによる侵略の脅威を読み取っており、ピサロはナポレオンのような人物であり、コツェブー自身もナポレオンを嫌っていた、またスペイン人はフランス人、従ってペルー人はイギリス人を表す、と主張している³¹⁾。これらの主張は『ペルーのスペイン人』がイギリスの観客や読者を熱狂させた頃の歴史的状況に符合する。

過去のスペインの征服者を大々的に描く『ペルーのスペイン人』は、上演当時のスペインの状況を生々しく示すものではない。むしろ過去からの偏見も交えた

スペインのイメージを示し、史実にも脚色を施しながら、実際のスペイン像とは違うものも指向している。この劇に熱狂したイギリスの大衆にとって、ピサロやその仲間たちの残酷な所業は当時最も脅威と感じられていたフランスの行動を想起させるものだったのであり、いわば、彼らは同時代のフランスの脅威がスペインの歴史上の征服者の面を被った姿だったのである。

また、ゴシック・ロマンスの典型的な特徴には、カトリック世界を舞台にし、そこに反カトリック的な要素が見られることもこれまでのゴシック研究でしばしば指摘されてきた。スペイン人を主人公にした『ペルーのスペイン人』では、ラス・カサスのような聖職者の登場もあるとはいえ、神の名のもとに残酷な征服事業を続けるピサロの姿は、このような反カトリック的な意識を抱かせるものである。この意識もまた、ゴシック・ロマンスが流行していた同時代のフランス革命の脅威と結びつけられて論じられてきたものである³²⁾。ペルー征服以来の残酷なスペインのイメージは18世紀末にいたっても偏見と共に残っていたが、『ペルーのスペイン人』が人気を集めていた時代においては、スペインの恐ろしいイメージが同じカトリック国家のフランスと結びついており、革命に対して感じられた脅威の問題と大いに関係している。それがまた、反カトリック的感情というゴシック・ロマンスとの繋がりを示すものでもあるのだ。

本節ではイギリスにとってのスペイン、さらにフランスといった国外への視点からピサロのイメージを政治的、歴史的に検証したが、果たして『ペルーのスペイン人』の人気は国内の政治方針を巡る状況と無関係であろうか。むしろ、この劇の人気を引き起こす因子は、さらにイギリス国内の政治的、歴史的状況にも求め得るのではないだろうか。この点について、次節でさらに考察を進める。

反奴隷制運動の高まりと 『ペルーのスペイン人』の受容

前節までに考察したような政治的、歴史的状況を抱えながら、コツェブーの劇におけるピサロを悪漢として捉えれば、その残酷な行為に苦しめられたペルーの民に観客や読者が同情の念を抱くのは自然であるし、彼らを救うために立ち上がるアロンソやロラには正義を見出しうる。またピサロを非難するラス・カサスの姿の描き方は極めて人道主義的なものであり、『インディアスの破壊についての簡潔な報告』を彷彿させる人物像である。1800年にサミュエル・アーゼント・バーズリー (Samuel Argent Bardsley) がシェリダンの『ピサロ』に関する論考を発表しているが、その中でラス・カサスの性格は人間性 (humanity) に敬意を

払い、この劇全体の中で最も非の打ちどころがなく、共感 (Sympathy) に値するものだと高く評価されている³³⁾。ここに見られる、虐待に苦しむ被支配者への人道主義的立場への高い評価は、当時のイギリスの政治体制を巡って交わされていた言説とも関係しているのではないだろうか。この節では『ペルーのスペイン人』の人気に対する歴史的検証として、さらにイギリス国内の政治状況、特に18世紀後半に奴隷制を巡って巻き起こった論争について取り上げる。

『ペルーのスペイン人』の先行研究において、18世紀後半のイギリスにおける奴隷制度の問題を作品の分析に含めたものは少なく、先に引用したサリヤやボードの考察にもこの問題は取り上げられていない。ドイツの非常に古い研究では、ヴァルター・ゼリアー (Walter Sellier) が『イングランドにおけるコツェブー』 (Kotzebue in England 1901) の中で、『ペルーのスペイン人』以前のコツェブー演劇である『黒人奴隷』 (Die Negersklaven 1796, 英訳は *The Negro Slaves* 1796) が英語に訳されてイギリスに登場した時、ちょうど奴隷貿易が問題視され、博愛主義的な傾向の強かった点を指摘してはいる³⁴⁾。だが、同書の『ペルーのスペイン人』を論じた箇所ではこの問題に言及していない。匿名の訳者による上記英訳版『黒人奴隷』の冒頭には、奴隷貿易廃止に尽力した政治家ウィリアム・ウィルバーフォース (William Wilberforce) に訳者からの献辞 “Dedication, by the Translator, to William Wilberforce, Esq.” が捧げられており、コツェブーの英訳作品の中では直接的にイギリスの奴隷制問題に関わるものである³⁵⁾。だが、この問題は『黒人奴隷』だけに限定されるものでなく、コツェブーの最大の人気作『ペルーのスペイン人』にも関連付けて考究すべきものである。

イギリスでは18世紀後半から奴隷貿易の問題が指摘され始め、反対運動が盛んになる。1787年には先のウィルバーフォースの他、トマス・クラークソン (Thomas Clarkson) やグランヴィル・シャープ (Granville Sharp) らによって奴隷貿易廃止促進協会 (The Society for Effecting the Abolition of the Slave Trade) が設立されている。1792年にはスコットランドの画家、および風刺画家であるアイザック・クルックシャンク (Isaac Cruikshank) によって、黒人奴隷への虐待を描いた絵も発表されている (図3)。クルックシャンクの絵は、奴隷貿易のもとで行われている残酷な仕打ちを視覚的鮮烈さを伴って告発するものであり、ここで虐待を受けているのが若い女性であることから、後に述べる女性たちによる奴隷制廃止運動の高まりに寄与したものである。だがこの絵が示唆するのはそれだけにとどまらない。虐待される奴隷と冷酷



図3 Isaac Cruikshank, "The Abolition of the Slave Trade, or The Inhumanity of Dealers in Human Flesh Exemplified in Capt. Kimber's Treatment of a Young Negro Girl of 15 for her Virjen [sic] Modesty."³⁶⁾



図4 *The Tears of the Indians* より³⁷⁾

な白人という対照的な構図とその衝撃的内容は、『インディアスの破壊についての簡潔な報告』に付せられた挿絵(図4)をも彷彿とさせる。スペインの征服者の残酷さを示す演劇が熱狂的に受け入れられていた時代において、物議を醸したクルックシャンクの絵とラス・カサスの著作の挿絵との共通点は、同時代の国民的関心事としてつながるものであり、単なる偶然として片づけるべきではない。『ペルーのスペイン人』が直接的に取り扱っている主題の中で、奴隷制や植民地支配の問題は当時のイギリス国内の政治的問題と密接に結びついて人々の問題意識に訴えかけるものであったはずである。この劇がイギリスで名声を獲得したまさにその時代、これらの問題を巡って盛んに論争が繰り広げられていたのである。

奴隷制度廃止へ向けた動きは加速し、文学作品にも

この流れが反映する。1770年代から1800年頃にかけて、アフリカ人奴隷の悲惨な境遇を描く詩や小説など、多くの作品例が見られ、これらは読者の共感に訴え、奴隷制度の廃止を主張するものであった。ただし、奴隷制度の問題を文学作品に取り上げる動機は様々であった。大石和欣の研究が明らかにしているように、メアリー・ロビンソン(Mary Robinson)やアン・イアズリー(Ann Yearsley)といった女性詩人は奴隷の姿を女性の性差別問題に重ね合わせ、フェミニズム的視点や体制批判的視点を含んでいる一方、国教会福音派のハナ・モア(Hanna More)は反体制的立場ではなく、博愛主義による植民地の改善を目指すという福音派の主張の範囲内で奴隷貿易を批判している³⁸⁾。政治的、あるいは宗教的立場を異にしながらも、奴隷制度という共通の社会問題が取り上げられ、各々の主張が展開されていたのである。

このように、当時のイギリス文学において、奴隷制度への批判は政治的、宗教的立場が異なっても、それぞれの主張を維持しつつ展開されていたわけだが、この批判の構図は18世紀末における『ペルーのスペイン人』の人気と共通したところがある。つまり、奴隷制度への強い反対意見が高まる中では、この悲劇のペルー人に対しては憐憫や同情を抱きつつ、一方彼らを虐待するスペイン人征服者たちには強い批判的視線が向けられる。この点において大きく一致していれば、観客や読者の政治的、宗教的立場は必ずしも同じである必要はない。また、彼らの視点がイギリスの帝国主義的政策による植民地支配そのものへの批判に基づく必要もない。むしろ、自国の政治的な立場の違いを超えて残酷な奴隷の取り扱いへの批判、またペルーの原住民に対して行ったスペイン人征服者の非道な振る舞いへの批判が可能であるからこそ、『ペルーのスペイン人』は多くのイギリス人読者、観客を熱狂させることができたのである。

ただし、このような形で『ペルーのスペイン人』が大きな反響を巻き起こしたのであれば、そこには危険な側面が含まれていることにも留意しなければならない。奴隷貿易への反発はイギリスの政策に対する批判であるが、『ペルーのスペイン人』でペルー人を酷使し、虐待しているのは過去のスペインであり、観客や読者はスペインの征服者たちを暴虐の輩として批判的に捉える。そして、当時アフリカやカリブ海地域に進めていた自国の拡張政策は忘れているか、もしくは見て見ぬふりをするようになるのだ。多くの大衆がこの悲劇に熱狂した一方、支配領域の拡大に伴う残酷な所業の責任は専ら過去のスペインの歴史上の人物に見出していたことになる。

厳しい抑圧や暴力を強いられたペルーの人々に対し

て同情を抱くことは、奴隷貿易反対運動における奴隷へのまなざしとも共通するものではあるが、ピサロによる征服を描いた『ペルーのスペイン人』にこのような背景を重ね合わせると、イギリスの植民地政策への問題意識は後景に退いてしまう。この悲劇作品は支配者によって搾取される奴隷が描かれているという点において、反奴隷制を訴える文学作品と共通してはいる。だが、『ペルーのスペイン人』への熱狂は、イギリスの奴隷貿易を直接批判するものではなく、奴隷への残酷な仕打ちの責任をステレオタイプ化されたスペインや、あるいは敷衍して考えれば、そのスペインに投影される同時代のフランスに見出し、自国の責任から目を逸らすものだったのだ。

スペインへの偏見や対立意識を含んだイギリスの歴史を踏まえ、そして同時代には革命の勃発したフランスに対する関係、さらに国内での奴隷貿易を巡る論争、このような状況に見舞われていたイギリスは『ペルーのスペイン人』が観客や読者の心をつかむ上で、実に好条件であったといえよう。だが、イギリスの奴隷貿易への批判的意識が強まる中でこの劇作品に熱狂する風潮が生まれても、批判の矛先はスペインやフランスに向けられてしまう。人気の背景に国内の奴隷貿易への問題意識があるとしても、それ自体への批判や反省はかわし、奴隷貿易問題の残酷な元凶は他国、それも対立関係にあった国へと投影されてしまったのである。劇の作者がドイツ人であるということも、この劇に夢中になったイギリス人が自らの責任に直接向き合えなかった要因となりうるものである。

では、こういった歴史的背景によってピサロのようなスペインの征服者にイギリスにとっての脅威や悪逆なイメージが重ねられているのに対し、ペルーの民はどのようなイメージで描かれているのか。実はそこにもまた問題があり、最後にその点について指摘しておきたい。スペインによって残酷な方法も行使されて征服されたペルーの人々は、コツェブーの演劇において純朴で友情に厚く、被害者としての側面に重きが置かれている。正義がペルーの人々にあることは疑いの余地のないことのように描かれているのだが、そこにはある種の理想化を伴っていることも指摘しなくてはならない。作者、さらには翻訳者、翻案者にその意識がなかったとしても、ピサロ達を悪として示す上で、彼らに虐げられたペルーの人々を被害者として、また対照的な民族として誇張を含めて描写している点については、慎重に読解する必要がある。

この問題は、先に考察した反奴隷制貿易を訴える文学作品の特徴にも見られるものであり、大石は白人女性がアフリカ人奴隷に共感、自己同一化し、自らの宗教的信念や政治的大義に同化することで、本来のアフ

リカ人女性の特徴や文化が消されてしまう問題を「フェミニスト・オリエンタリズム」という言葉で示している³⁹⁾。『ペルーのスペイン人』におけるフェミニズム批評的な考察は、ここでは論旨が拡大しすぎるために展開できないが、オリエンタリズムの問題はこの劇においても極めて重要である。この概念について、エドワード・W・サイードが『オリエンタリズム』(Orientalism 1978)の中で次のように述べている。

オリエントとは、むしろヨーロッパ人の頭のなかで作り出されたものであり、古来、ロマンスやエキゾチックな生きもの、纏綿たる心象や風景、珍しい体験談などの舞台であった。⁴⁰⁾

サイードがオリエントとして述べている地域は主にアフリカやアジア、イスラム諸国であり、「オリエント」の語に南米は含まれない。従って、ペルーを描いた悲劇に直接的にこの言葉を適用することはできない。だが、『ペルーのスペイン人』における南米住民の描き方には、アフリカ人奴隷貿易の問題を描くイギリス文学作品のオリエンタリズムと近い様相を見出すことができる。そしてこの劇作品の人気の背景には、他ならぬイギリスの奴隷貿易を巡る文学作品の興隆があるのだ。

ピサロによる侵略当時のペルーの人々の反応について、ここでその姿を歴史的に詳しく実証して示すことはできないが、大航海時代に書かれた様々な資料にはコツェブーの描き方とは異なる、好戦的で、時には野蛮なペルーの民の様子も描かれている。しかし、コツェブー作品におけるペルー人は極めて温厚であり、スペイン兵へとの戦闘は行われるものの、逆襲や復讐の場面には焦点が当てられない。もちろん、実際のペルー征服史においてスペインが行ったことには残酷な側面が多く、ラス・カサスが告発したように、多くの無垢なる民が不当な方法でその命を奪われている。だが、それを踏まえても、コツェブーの劇に登場するペルー人の姿をそのまま事実に基づくものとして受け止めることは、客観的な態度ではない。

また、文化批評としてのオリエンタリズムという語が使われる遥か以前、『ペルーのスペイン人』が上演されていた当時の人々にも、もっと素朴な形でこの概念に近い意識が存在していた。現代の我々は、ヨーロッパ諸国が「他者」としての東洋の国々に対して現実から遊離したイメージを持つことをオリエンタリズムと称してまとめ、理想化されたペルーの被支配者にもそれに近いものを見出すことができる。しかし、『ペルーのスペイン人』の受容に関して歴史的な検証を進めると、このような概念を適用する以前より、既にペルー

人の描写に関する冷静な分析がなされていたことがわかるのだ。

先に引用したバーズリーによる『ピサロ』評は、登場するペルー人がペルー人らしくないとあちこちで言及している。ペルー人の性格や風習、登場人物が発するレトリック、宗教観などが疑問に付され⁴¹⁾、これらを「歴史的蓋然性」(Historic probability)への冒瀆として批判している⁴²⁾。「蓋然性」という18世紀的な批評用語を使ってはいるが、当時からこの作品におけるペルー人の描写には違和感が抱かれていたのである。もちろん、バーズリーによるペルーへの理解がそれほど正確だったとはみなせないし、バーズリー自身の思い込みからこの劇のペルー描写に疑義を呈している可能性も否定できない。だが、『ペルーのスペイン人』が人気を博していた当時から、ペルーの被征服民に演劇的な効果を高めるための脚色が施されていることは見抜かれており、その意味において今日のオリエンタリズムに近い要素は既に看破されていたのだ。それだけ、この作品におけるペルー人表象は問題を含むものなのである。

結 論

コツェブーがスペインの征服者によるペルーの征服という問題をテーマに選び、『ペルーのスペイン人』を完成させたことで、ドイツのみならずイギリスにおいても大反響が巻き起こったが、特にイギリスにおいてこの劇が熱狂的に受け入れられたその背景には、ゴシック・ロマンスの悪漢ヒーローの系譜といった文学的潮流があり、それはさらにイギリス、スペイン、フランスの間に横たわる歴史的、政治的関係と組み合わさっている。ピサロやその仲間の征服者たちには、スペイン人としての紋切り型の性格造形やイデオロギー的な偏見が混じっている。過去のスペインのイメージのみならず、同時代に対立していたフランスの革命やナポレオンのイメージさえそこには投影され、さらには自国イギリスの奴隷貿易の問題までもが背景に重なる。このような状況で、いわばスケープゴートにも似た役割を悪漢ピサロは担わされていた。

18世紀末のイギリスの文学界において、これほど様々な歴史と国を横断し、重要な歴史的、政治的問題を屈折、錯綜した形で含んでいる作品は希少である。英文学研究において、英訳されたコツェブー演劇の重要性について語られる機会は少ないが、18世紀末、あるいはゴシック・ロマンスやロマン主義文学の研究においても論題となる様々なテーマが『ペルーのスペイン人』とその受容には凝縮されており、この重要性は無視できない。

また、ピサロらスペイン人征服者が担った悪漢とし

ての役割とは対照的なペルー人の描写も、額面通りに受け取ることのできない複雑な問題を抱えている。素朴で正直で親しみやすい民族として描かれているペルー人であるが、その言葉、行動、感情はみな一方的にヨーロッパ人によって形成されたものであり、本来のペルー人の声は直接響いていない。それはサイドが『オリエンタリズム』で示したヨーロッパ文芸の典型的な特徴によく当てはまるものである。

『ペルーのスペイン人』は、ゴシック的な悪漢ヒーローとしての素質を持つピサロら征服者側、さらに彼らに虐待される被征服者側のペルー人双方を一つの舞台上に描くことで生じる多くの問題を提起し、さらにこの作品が迎えられた同時代の国内外の政治的問題、世紀をまたぎ海を越えた歴史的問題をも集約している。この悲劇は、ゴシック・ロマンスやイギリス・ロマン主義文学研究のみならず、オリエンタリズムやポスト・コロニアリズムなど、様々な問題系へと接続する可能性を持っており、今後さらなる解読と議論とを必要とする、重要な文献である。

*本稿は2018年3月16日、アメリカ、フロリダで行われたThe 39th International Conference on the Fantastic in the Artsにおいて口頭発表した“‘Pizarro’ as a Gothic Villain”を日本語にし、大幅に加筆・修正を加えたものである。また、JSPS 科研費 17K13413 の助成を受けた研究成果の一部でもある。

注

- 1) ミルチャ・エリアーデ、堀一郎訳『永遠回帰の神話——祖型と反復——』(未来社, 1963) p. 21.
- 2) William Wordsworth, “Preface to *Lyrical Ballads*, 1800,” *Lyrical Ballads, and Other Poems, 1797–1800*, eds. James Butler and Karen Green (Ithaca: Cornell UP, 1992), pp. 746–47.
- 3) 市川純「イギリス・ロマン主義における“German Tragedies”の翻訳：コツェブーの『ペルーのスペイン人』」『英語英文学叢誌』第44号(2015) pp. 63–77.
- 4) Michael Gamer, *Romanticism and the Gothic: Genre, Reception, and Canon Formation* (Cambridge: Cambridge UP, 2000), p. 149.
- 5) V. Stockley, *German Literature as Known in England 1750–1830* (London: Routledge, 1929), p. 181.
- 6) Stockley, p. 190.
- 7) Stockley, pp. 188–90.
- 8) Stockley, p. 187. 以下、英語文献からの引用は訳者の明記が無い限り、筆者による拙訳である。
- 9) Christoph Bode, “Kotzebue, August von,” *The Encyclopedia of Romantic Literature*, general ed. Frederick Burwick, associate eds. Nancy Moore Goslee and Diane Long Hoeveler, vol. 2 (MA: Wiley-Blackwell, 2012) p. 736.
- 10) 歴史上のバルベルデは秘書ではなく司祭であった。

- 11) Augustus von Kotzebue, *The Spaniards in Peru; or, the Death of Rolla*, trans. Anne Plumptre (London: R. Phillips, 1799), p. 4. 強調部分は原著による。
- 12) Kotzebue, *The Spaniards in Peru*, trans. Plumptre, p. 4. 強調は原著。
- 13) Eino Railo, *The Haunted Castle: A Study of the Elements of English Romanticism* (NY: Gordon P, 1974), pp. 28–32.
- 14) Carol Margaret Davison, *Gothic Literature 1764–1824* (U of Wales P, 2009), p. 69.
- 15) Helen Stoddart, “Hero-Villain,” *The Handbook to Gothic Literature*, ed. Marie Mulvey-Roberts (Hampshire: Macmillan, 1998), p. 113.
- 16) ラス・カサス, 染田秀藤訳『インディアスの破壊についての簡潔な報告』岩波文庫 (岩波書店, 2013) p. 28.
- 17) ラス・カサス p. 29.
- 18) ラス・カサス p. 187.
- 19) 『インディアスの破壊についての簡潔な報告』の出版やその扱いを巡る歴史について, 詳しくはラス・カサス『インディアスの破壊についての簡潔な報告』の訳者, 染田秀藤による同書解説を参照 (pp. 272–97)。
- 20) 挿絵は『インディアスの破壊についての簡潔な報告』のジョン・フィリップス (John Phillips) による英訳 *The Tears of the Indians: Being an Historical and True Account of the Cruel Massacres and Slaughters of above Twenty Millions of Innocent People; Committed by the Spaniards in the Islands of Hispaniola, Cuba, Jamaica, etc. As also, in the Continent of Mexico, Peru, and Other Places of the West-Indies, to the Total Destruction of Those Countries* (London: J. C. for Nath. Brook, 1656) より, 頁数表記はないが, p. 6 と 7 の間に挿入されているもの。
- 21) 注 20 と同じく p. 8 と 9 の間に挿入されている。
- 22) セブールベダ, 染田秀藤訳『第二のデモクラテス 戦争の正当原因についての対話』岩波文庫 (岩波書店, 2015) pp. 116–17.
- 23) セブールベダ p. 136.
- 24) Diego Saglia, *Poetic Castles in Spain: British Romanticism and Figurations of Iberia* (Amsterdam, Atlanta: Rodopi, 2000), p. 43.
- 25) Kotzebue, *The Spaniards in Peru*, trans. Plumptre, pp. 11–12.
- 26) インカ帝国最後の国王はアタワルパ (Atahualpa) であるが, コツェブーの原文も英訳も Ataliba と表記している。なお, ドイツ語原文のテキストは August von Kotzebue, *Die Spanier in Peru, oder Rollas Tod* (Wien: Johann Baptist Wallishausser, 1796) を参照した。
- 27) Kotzebue, *The Spaniards in Peru*, trans. Plumptre, p. 88.
- 28) Kotzebue, *Pizarro*, adapt. Richard Brinsley Sheridan (London: James Ridgway, 1799), pp. 74–76.
- 29) ただし, 当時の書評の一つとして『クリティカル・レビュー』(*The Critical Review*) の論評を挙げると, シェリダンの翻案はタイトルを『ピサロ』としたことから, ピサロを主人公に据えているゆえにその死までを描く必要があるのだという捉え方をしている。*Critical Review; or, Annals of Literature; Extended and Improved*. 26 (July 1799), pp. 308–316.
- 30) Saglia, p. 44.
- 31) Bode, p. 740.
- 32) ゴシック・ロマンスとカトリック世界の表象についてはこれまで様々な論考が著され, 反カトリック的な特徴については当然のように指摘されてきたが, 最近では Maria Purves, *The Gothic and Catholicism: Religion, Cultural Exchange and the Popular Novel, 1785–1829* (Cardiff: U of Wales P, 2009) など, むしろカトリックに対する寛容に注目した論考もある。
- 33) Samuel Argent Bardsley, *Critical Remarks on Pizarro, a Tragedy, Taken from the German Drama of Kotzebue, and Adapted to the English Stage by Richard Brinsley Sheridan. With Incidental Observations on the Subject of the Drama* (London: T. Cadell, Junior, and W. Davies, 1800), pp. 31–32.
- 34) Walter Sellier, *Kotzebue in England* (Leipzig: Druck von Oswald Schmidt, 1901), p. 7.
- 35) August von Kotzebue, *The Negro Slaves: A Dramatic-historical Piece, in Three Acts*, trans. anon. (London: T. Cadell, Junior, and W. Davies, 1796), pp. iii–iv.
- 36) Isaac Cruikshank, “The Abolition of the Slave Trade, or The Inhumanity of Dealers in Human Flesh Exemplified in Capt. Kimber’s Treatment of a Young Negro Girl of 15 for her Virjen [sic] Modesty” (London: S. W. Fores, 1792).
- 37) 注 20, 21 と同じく頁数表記なし。p. 16 と 17 の間に挿入されている。
- 38) 大石和欣「[共感の疼き]——女性詩人たちとそれぞれの奴隷貿易廃止運動」『揺るぎなき信念——イギリス・ロマン主義論集』新見肇子, 鈴木雅之編著 (彩流社, 2012) pp. 29–45. 同「錯綜した慈善のイデオロギー——ハナ・モアと奴隷貿易廃止運動」『イギリス・ロマン派研究』第 32 号 (2008) pp. 1–13.
- 39) 大石 (2012) p. 37.
- 40) エドワード・W・サイード, 板垣雄三・杉田英明監修, 今沢紀子訳『オリエンタリズム』上, 平凡社ライブラリー (平凡社, 1993) p. 17.
- 41) Bardsley, pp. 32–36.
- 42) Bardsley, p. 45, 47.

<連絡先>

著者名：市川 純

住 所：神奈川県横浜市青葉区鴨志田町 1221-1

所 属：外国語学研究室

E-mail アドレス：j-ichikawa@nittai.ac.jp